

シルバー世代の温泉旅行実態

安達 清治

1. プロローグー超高齢化社会

日本の高齢者（65歳以上は3,074万人＝平成24年）は3千万人を突破した。総人口に占める割合も24.1%＝総務省になった。75歳以上（後期高齢者）も1,517万人であり急速な高齢社会となっている。先進諸国と比べ高齢化は2倍のスピードで進行しており、さらに10年後は75歳以上の後期高齢者が増加する。日本が経験したことがない超高齢化社会へ進行中である。

しかも少子化と高齢者のシングル化も同時に進行している少子高齢化社会でもある。少子化社会は、子供世代の減少と、パラサイトシングルばかりか高齢者の単身世代の増加もあり、高齢化社会は一人暮らしの高齢者が増加している。

このため高齢者の自立と社会参加が求められている。高齢者の社会活動参加が必要になっているがこれら活動に参加している高齢者は42.3%（総務庁93年）となっている。活動内容は、健康、スポーツ、趣味が多く、環境改善や教育は22%に過ぎない。

超高齢化社会は、経済活動の変化はもとより社会活動の変化が必至であり、高齢化社会のデザインが早急に求められている。とくに日本の伝統的な温泉旅行では、人気は高いもののシルバー世代にとっては医療と癒し、そして健康、余暇の面からも利用が求められているが、どの温泉地も歴史は深い効能主義ばかりで、施設はバリアフリー化や高齢者向けの施設対策が遅れており、温泉地の施設は急速な高齢化の利用者に対する対応が必要となろう。

そこで急速な超高齢社会におけるシルバー世代の社会活動参加が求められている。うつ病や認知症などにより寝たきりにさせないためには（現在、認知症患者は300万人で今後500万人時代が予想されている）、健康、スポーツ、教育面での対応が求められている。自然に囲まれた日本の温泉地は、こうした世代に適しており、五感の活性化が図られるなどの環境にあるものの、温泉の効能主義の時代から、食事面や旧態依然の施設、高齢者に対応できる施設や、温泉地域でのケアシステムも求められている。

2. 伝統的な温泉旅行

高齢者時代で夫婦での旅行に人気

日本には三命数という言葉がある。

道後温泉（愛媛県）、有馬温泉（兵庫県）、白浜温泉（和歌山県）を三古湯という。日本を代表する古い温泉地のことである。しかも平安時代の作品である『枕草子』（清少納言）には、「湯はななくりの湯、有馬の湯、玉造の湯」（能因系本のみ）と温泉の記載がある。それほどまでに古くから温泉の利用があった。

江戸時代には、庶民が温泉を利用したことは古川柳に、「江戸者が 多いと話す 草津の

湯]、「江戸の痘瘡に 草津の 笹湯なり」、「迎え湯に きたりなよりな 軽井沢」とうたわれていることからわかる。温泉利用は「一巡り」（一週間）が平均であり、性病に効果があるとされた笹湯の草津に治療のために行った。あるいは病後の静養のために利用している。湯治を目的としたものが一般化した。

しかも、江戸時代は温泉地は 292 ヶ所（旅行用心集）だったが、現在は 3,170 ヶ所（総務省調べ）にも増加している。ボーリングによる掘削技術によって日本全国に温泉地は拡大発展した。

近代から戦後の期間は、温泉旅行は企業の旅行として、春は新入社員との旅行、秋は社員の慰安旅行に利用されていた。会社ぐるみの団体旅行であり、高度経済成長期は海外でも行われていた。

現在は企業の団体旅行は下火になったが、グループや夫婦での旅行に温泉旅行は盛んである。アンケート調査では夫婦での温泉旅行がトップである。日本の国内旅行の旅行タイプ別需要調査では、周遊旅行に次いで温泉旅行が 2 位であり、さらにここ数年で温泉旅行の形態の旅行が増加傾向にある。（JTB 旅行調査 2011 年度 = 参照）

高齢者にとっては温泉旅行は五感の活性化や、手ごろなレジャーとして人気があるものの、二つの面から課題が表面化している。3・11 によって西高東低（西の温泉地が人気で、東は低調）である。現在も福島原発の風評の影響によって東北 6 県への旅行者が需要が減少している。現在でも東北 6 県への風評被害が払拭できずに敬遠されている。風評被害の払底化対策をしなければ観光産業にとっても、東北 6 県の復興にとっても解決しなければならない課題である。

もう一つは、温泉地とくに温泉地の宿泊施設はバリアフリー化が遅れていることである。どこの温泉地も歴史が古く施設は健常者向きであり、高齢者には厳しい施設ばかりである。湯治で有名な鳴子、三朝温泉に行ったが、有名な宿泊施設ほどバリアフリー化が遅れている。今夏に三朝温泉の「木屋」という老舗旅館を今夏利用したが、館内も風呂場もバリアフリーではない、河原の露天風呂は高齢者向きではない。（写真参照）階段と岩肌があり高齢者には利用しにくい。歴史の深い温泉地は急速な高齢化に対する対応が急がれているといえる。

さらに温泉地では湯治場の歴史があるため、短期宿泊からさらに数日間の連泊を呼びかけている。

三朝温泉でも現代の湯治場としての利用をキャッチフレーズにしているものの、連泊による 2 日目から料金が割引や半額化が導入されている。しかし食事は全く同じものであり、食事面の対応—医学上からの食事療法、あるいは泊食分離のシステムが必要となろう。大型旅館はどこもバイキング方式で、むしろ食べ過ぎからの危険な食事を利用していること一になる。

3. アンケートに見る高齢者の温泉旅行

食事、入浴施設、遊歩施設等の指摘が多い。

高齢者の旅行実態は、アンケート調査でも予想以上に温泉旅行の人気は高い（表 1 参照）。温泉旅行のいい点は、健康が増進され、のんびりとした気分になれる、リラックスできる、としている。毎年 1-2 回は、温泉旅行に行っており、夫婦での旅行者が多く、次いで家族で旅行し、宿泊は平均が 1 泊であり、宿泊料金は 1 万円としており、平均的な高齢者の温泉旅行

表1 シルバー世代の温泉旅行アンケート調査

(平成24年9月開始、12月まで)

項目	内容	項目	内容
男女別	男性 37 人 (53%) 女性 33 人 (47%)	宿泊数	1泊 40 人 (60%) 2泊 20 人 (37%) 3泊以上 7 人 (3%)
年齢別	60 歳から 69 歳 38 人 (54%) 70 歳以上 32 人 (46%) (80 歳以上は 2 人)	同行者	単独 5 人 (7%) 夫婦 31 人 (44%) 家族 14 人 (20%) グループ 20 人 (29%)
年間旅行回数	1 回 12 人 3 回 8 人 2 回 23 人 4 回 6 人 5 回以上 16 人	足湯について	気持ちよかった = 41 人 利用したことはない = 20 人 (清潔度に難の指摘がある)
年間温泉旅行回数	1 回 40 人 (57%) 2 回 22 人 (31%) 3 回以上 8 人 (11%) (年 10 回以上が 2 人いる)	宿泊料金はいくらがいいですか。	8,000 円 24 人 (35%) 9,000 円 5 人 10,000 円 33 人 (49%) 12,000 円以上 6 人
温泉旅行の好きな点	① 温泉は健康が維持される。 ② 温泉はのんびりできるからいい。気分が和らぐからいい。 ③ 温泉は癒される。 ④ 温泉は孫と一緒に楽しめるから。 ⑤ 食事が楽しみ。		
温泉旅行の嫌いな点、問題点	① 連泊では食事の内容が同じで飽きる (女性)。 ② 食事の量が多い (女性)。 ③ 泊食分離がいい。 ④ 長湯だけでつまらない。 ⑤ 入浴場は滑りやすく危険。旅館の階段が多くで怖い。 ⑥ 騒々しい旅館、ホテルは嫌いです。		
行きたい温泉地	西日本方面 = 別府温泉、道後温泉、黒川温泉、万座温泉、有馬温泉、指宿温泉。 東日本方面 = 大沢温泉、熱海温泉、箱根温泉、伊東温泉、熱川温泉、鬼怒川温泉、伊香保温泉、花巻温泉、草津温泉。山中温泉、山代温泉、福地温泉 (岐阜県)、下諏訪温泉、鳴子温泉、 北海道方面 = 登別温泉。海外方面 = 北投温泉 (台湾)		
備考	●調査対象は関東地域の人である。銀座、戸塚油絵クラブ、中学 (足立区立の同窓会)、早稲田大学 (川口地域の同窓会)、杉並 (カラオケクラブ)		

※調査人・安達清治

の実態が浮かび上がる。夫婦での旅行の他に孫と一緒にの家族での温泉旅行が楽しみとする人もいる。

同行者では、シルバー世代はやはり夫婦での温泉旅行がトップである。次いで家族での温泉旅行であり家族での旅行は、子供夫婦と一緒にや、孫と一緒になど新たな旅行形態が出現している。やはり伝統的なグループでの旅行はパッケージツアーの利用であろうか。手軽であり人気は高い。

どこの温泉地でも見られる‘足湯’では、評判がいいものの、循環での不潔感や、水虫の伝染の恐れを指摘する人もある。温泉地の定期的な掃除や清潔に保つ努力が望まれている。利用しない理由には、ストッキングを脱ぐのが面倒だからとする女性もいる (写真参照)。

一方、嫌いな点、問題点では、旅行の経験者であり、高齢者であるということから、指摘されている点がある。食事面での指摘は食事を楽しみとする人より、問題とする人が多い。連泊した場合は、食事内容が連日同じである。料理の品数が多過ぎるし、料理も多すぎる。健康上からは旅館でも泊食分離がいい、等である。食事に対する関心度が高く改善する余地がありそうである。

嫌いな点。満足できない点では、旅館は階段が多い。入浴場は滑りやすく危険と、高齢者にとっての課題だ（写真参照）。また、温泉旅行は入浴だけで満足できない、長湯はつまらない（女性）、としている。温泉地に高齢者が楽しめる施設がないことも指摘される。例えば高齢者用の遊歩道や遊戯施設、工芸などのカルチャー施設などである。

4. 行ってみたい温泉地

都心周辺の交通利便地に

行ってみたい温泉地では、関東地域の人で調査しているため東日本の温泉地が結果的に多い。熱海、伊東、箱根の温泉など代表的な温泉地を選んでおり、関東周辺と東北地域の温泉地が多い。遠距離地の温泉地－別府温泉や道後温泉などの西日本の温泉地はやはり少ない。北海道方面の温泉地を上げる人がは少ない。やはり遠距離地の温泉地なのだろうか。

海外の温泉地では、北投温泉（台湾）を選んでる人が一人いる。北投温泉には日本の加賀谷旅館が進出しており、和風旅館であり今後は人気が予想される。

代表的な温泉地を選んでるのは、日本の伝統的な温泉地であり、雑誌、テレビなど宣伝の露出も多いことや、交通の利便性などが考えられる。高齢者は秘境地の温泉や不便である温泉を身体的に敬遠しているかもしれない。遠距離地でも別府、道後温泉などの温泉地は交通の利便性がある。

たとえば山陰地方の温泉地に城崎温泉と三朝温泉がある。城崎温泉は JR の城崎温泉の駅に隣接して温泉地がある。城崎温泉は大阪からも特急本数は多く、三朝温泉は特急は少なく、JR の倉吉駅からさらにバスかタクシーで温泉であり、タクシーでも片道 2,500 円である。

温泉地へは時間のかかりすぎや、乗り継ぎがあると高齢者の利用者には厳しい面がある。

関東でも熱海、伊東温泉や鬼怒川温泉では、箱根、熱海温泉がアンケート調査でも、再び人気が出ているのも関東での温泉地への交通の利便性だろう。箱根、熱海、熱川、伊東温泉では駅に隣接している温泉地である。

これに比べ、草津温泉、大沢温泉、花巻温泉、北海道の遠距離地域の温泉はわずかであった。

なお人気順位は以下の通りであった。

- ①位 箱根温泉
- ②位 伊東温泉
- ③位 熱海温泉
- ④位 草津温泉

4 位以下は、関東・甲信越方面の山中、山代、伊香保、福地温泉、東北方面では大沢温泉、花巻温泉。西日本では、別府温泉、道後温泉が上げられている。

注) 朝日新聞の人気の温泉調査（全国 2,217 人＝24 年 10 月 20 日）では、1 位箱根、2 位

草津、3位別府であった。根拠は効能、宿泊設備、街の雰囲気である。しかし、20位以内に東北方面の温泉が一軒もない。

5. 旅行業者の高齢者対策

イスの食事や短距離の歩行距離

旅行業者は70歳台にターゲットを当てた商品を発売している。

表2 旅行業者の高齢者向け（70歳台）の商品の特徴

対象	内容
部屋	寝室は洋式のベットにする。
食事（レストラン）	食事にはイス席にする。
歩行距離	旅行中の歩行距離はできるだけ短めにする。
出発・到着	早めの帰着で、ゆっくり出発する。
参加人員	少人数制にする。1人でも可。
トイレ休憩	トイレ休憩は、できるだけこまめに回数を増やす。

すでに非健常者用の商品を発売しているが、高齢者時代に対応した商品によって高齢者時代の旅行に対応している。

高齢者向きのツアー商品の特徴は、旅行者をあまり歩かせず、部屋内ではイスに座り、食事をし、ベットで寝ることであり、旅行中はトイレ休憩を増やして、ゆとりある日程にしている。高齢者の三大特質である座ることは、布団での就寝や、畳での座った食事、和式トイレを避けたことである。旅館では、食事はイス席が増えたが、布団での利用での就寝からベット化へは進んでいない。

JTBでは70歳以上を対象にしたこのような内容で国内旅行の「ゆとり紀行」のツアーを発売し、人気商品となっている。

しかし施設側の対応が遅れており、宴会場は座って食事をしたり、布団であり、共同風呂はバリアフリーでないからである。しかも依然として共同風呂、露店風呂での対策がなく不安である。共同風呂では手すりの増設、風呂場の床のスベリ止めや、お風呂温度の低温化風呂との分離は高齢者時代の温泉施設の必要条件である。

さらに館内は完全フラット化が望ましく、部屋内も当然である。さらに館内、部屋、風呂場には手すりの増設が望ましい。案外、トイレの手すりがない施設が多く、最近のマンションは、トイレと風呂場内の手すりの増設は常識となっている。

6. 日本バリアフリー観光推進機構

全可14カ所にバリアフリーツアーセンター

特定非営利活動法人の日本バリアフリー観光推進機構が活動している。主な活動はバリアフリーの推進があり、バリアフリー研修、観光施設等のバリアフリー調査、セミナー活動や、ページによる情報提供活動（アクセスは全国バリアフリー旅行）、全国14カ所に設置されて

いるバリアフリー ツアー センターの団体との協力活動がある。(平成 24 年現在) バリアフリーツアーセンターの事業コンテンツは ①観光施設等のバリアフリー調査 ②独自サイトからのバリアフリー情報発信 ③人的介助サービス ④バリアフリー研修サービス ⑤バリアフリーモリタリングツアー ⑥車いす、福祉機器の貸し出しサービス ⑦建物のバリアフリー回収サービスが挙げられており、各センターの実力に合わせてサービスを展開している。

また、バリアフリーツアーを専門とする旅行業者 14 社が紹介されており、国内旅行から海外旅行まで扱っている。高齢化社会の新しいシステムづくりであろう。

7. ま と め

三名泉という言葉がある。有馬温泉（兵庫県）、下呂温泉（岐阜県）、草津温泉（群馬県）の三温泉であり、江戸時代からの日本の代表的な温泉であると言われている。

これらの温泉地の共通している点は歴史も古く、温泉は自然に囲まれており、現在も一大温泉街として発展していることである。しかも江戸時代と戦後のバブル期に拡大しているが、宿泊施設は旧態化しており、近代的ホテルと同居している。施設は団体旅行に対応しているが団体旅行の減少があり、グループや夫婦旅行などの形態の旅行者の増加に変化している。

しかも温泉地は依然、効能主義であり急速な高齢化による高齢者に対する施設、温泉地の対応一高齢者の遊歩施設やスポーツ施設等が急務となっている。宿泊施設も同様バリアフリー化が急がれるが、食事面での対応も必要となっている。アンケート調査では、食事の量が多すぎる、泊食分離を希望している。温泉地の改革は狭まっている。今後温泉独自のケアシステムの設置も必要となる等、温泉地の改善は急務の時代であろう。

資料・参考文献

- 高齢社会へのメッセージ 丸善ライブラリー（平成 11 年発行）著者 宮島 洋
- 超高齢化社会の基礎知識 講談社現代新書（平成 24 年 1 月発行）著者 鈴木隆雄
- 数字が語る旅行業 2012 日本旅行業協会発行（平成 24 年 6 月発行）
- 旅行用心集 八坂書房蔵本=八坂書房（文化 7 年発行）著者 八坂産庵
- 文人が愛した温泉 ジェー エー エフ出版（2006 年 4 月発行）
- 近代の作家と温泉 近代文芸社（2009 年 10 月発行）著者 安達清治
- 江戸の旅人と江戸川柳 遊企画出版（2007 年発行）著者 安達清治
- 江戸の女たちの湯あみ 新潮社（1996 年発行）著者 渡辺信一郎
- JTB 旅行調査 ジェー ティー ビー（2011 年）



写真は三朝温泉の河原にある露天風呂
(平成24年9月)



成人でも厳しい露天風呂(登別温泉)



共同風呂も手ずりが欲しい(岳温泉)



どこの温泉地も‘足湯’だが
(登別温泉の“手湯”)